

# 「予防教育」の実際と可能性

山崎 勝之

鳴門教育大学予防教育科学センター所長

新連載

## 第1回——生徒指導上の課題と予防教育

鳴門教育大学の予防教育科学センターでは、児童・生徒の健康と適応を守る予防教育を開発し、学校で実践している。これまでに類を見ない教育だが、多くの府県の事業化にも支えられ、全国普及の緒に就いたところである。

本連載では、この新教育の理論、方法そして教育効果、さらには今後の可能性について広く紹介したい。その効果の高さから、いち早く多くの学校に導入されることを願っての連載となる。

### 1 児童・生徒の健康と適応状況

近年、児童・生徒の健康や適応上の問題は、大人世界の縮図と化している。健康で言えば、肥満や高コレステロール児の増加など生活習慣病予備群が子どもたちにも増えてきた。また精神面でも、これまで子どもには無縁だと思われていたうつ病が、小学生や中学生でも成人並みの罹患率であることが分かって来た。

適応上の問題では、いじめや不登

校などは相変わらず多発し、自殺に至るケースも少なくない。これも大人数の縮図であり、後に続く成人期が抱える問題の先取りとも言える。自殺と言え、成人の自殺で気になることがある。経済の立て直しにより、ここ2年自殺者が3万人を

切り減少傾向にあるが、近年の20代の若者の自殺者増加が、いまだに目立っている。人生のモラトリアムから大人社会へと独立するにあたり、遭遇する壁を乗り越える力がない。その力は、本来幼少期に培うものだが、それが培われていないということである。

思えばその萌芽は、近年の「中1ギャップ」と呼ばれる現象に見られる。小学校から中学の壁さえも越えられないひ弱さである。その壁は越えるもので、決して壁をなくそうとする教育に終始してはならないことに警鐘を鳴らしておきたい。

### 2 学級運営の難しさ

本連載で紹介する予防教育の授業

では、過去3年間に限っても百を超える小・中学校の学級に、延べ1000時間を超えて入ってきた。これほど長時間入っていると、近年の学級の問題を孕んだ有様がありありと見えてくる。

その有様は一言で言えば、学級の運営が難しくなっている、ということである。最大40名の学級集団の中で、教員が進める授業に統率がとれていない。教師の話を遮り口々に話す、指示が通りにくい、始終手遊びをしている……。この状況を学級崩壊とは呼ばないであろうが、厳しめに見ると「授業運営崩壊」とも言える状況である。怖いのは、その状況に手をこまねいている中で、学校教員にとって「それが通常である」という意識が芽生えていることだ。健全な授業への姿勢という点では、子どもも教員も後退し始め、このままでは数年後には、この状態が学級文化になってしまう。

近年のインクルーシブ教育への潮流の中、発達障害の子どもが6・5%

ほど学級に在籍している。と言っても予防教育の授業では、特別支援が必要な子どもたちは多くの場合優等生で、何ら問題を感じて来なかったことは特記しておきたい。

この授業運営状況の中、子どもたちは授業に魅力を感じず、授業に居場所を見失っている。学校で最も時間を費やし重点が置かれる授業がこの状況であるから、ここから当然の成り行きで子どもの問題が顔を出す。少なくとも、問題発生のおきかには、いじめも不登校も校内暴力も、授業運営の問題が引き金になっている場合が多いのである。

### 3 抜本的対策の必要性

児童・生徒の健康や生活上の問題に対して、問題が起こったときの対処では手厚い対策がとられてきた。スクール・カウンセラーの学校配置はその最たるものである。このよ

うな事後の対処は重要であるが、いじめの問題を例にとると、それは何らかの抑止力を行使する対処になっ

ている。つまり、限定された学校教育という時と場において、いじめ加害や傍観行動を抑えようとしている。時と場が移り変われば、いじめは性懲りもなく芽吹く。

これでは、学校教育の本質からは外れる。学校は、いつでもどこでもいじめ加害をしない、いじめを傍観しない子どもを育成する場ではなかったのか。このままでは、問題のつけを後の発達段階、そして成人にまで回してしまう。つまり、問題は大人社会に引き継がれ、そして何よりも、子どもたちの安寧に満ちた人生を阻害してしまう。

ある。筆者は過去25年ほど、子ども

いじめ問題が解決されず、むしろ

この予防になる。問題を予防しよう

エスカレートしているような現況も、この学校教育の姿勢に起因している。過去にはいじめが社会問題化した時期が4回ほどあったが、同じ過ちをいつまで繰り返すのか。

問題が起こってからの対処を「治療的対処」と呼べば、もう一つの対処の観点は「予防」になる。問題

問題が起こつてからの対処を「治療的対処」と呼べば、もう一つの対処の観点は「予防」になる。問題

本邦発の書籍であるが、これを読めば、世界ではこの予防教育がどれほ

ど多く、どれほど多様に行われているかが分かる。

私たちは日本での予防教育を開発するにあたり、国内ならびに海外の研究者や教育者と専門家を構成して共同の姿勢をとってきた。過去4年間に、日本と世界の予防教育研究者を招いて大阪で開催した国際会議だけでも3回にのぼる。

予防教育では、社会・感情学習と呼ばれる教育が世界でもっとも先行している。写真1は国際会議において、そのメッカであるアメリカ・シカゴのキャセル・センターのプレジ

### 4 世界の学校予防教育

昨年、「世界の学校予防教育」（共編著、金子書房）という書籍を上梓した。そこでは、北米、ヨーロッパ、オーストラリアを中心に学校での予防教育を広く紹介した。類書はなく



写真1. 「予防教育」国際会議の光景

デント、ワイズバーグ博士がプレゼンを行っている光景である。この社会・感情学習の迫力ある普及度を見れば、日本は遅れているな、という印象を持ってしまふ。他にも多くの予防教育が世界では行われている現況を前に、日本も急ぐ必要がある。もちろん、日本の研究者も多様な予防教育を開発しているのであるが、その適用は細々と限定的に行われているにすぎない。そこで登場する本連載の予防教育は、日本の学校教育界に適合した、世界に類のない新教育となった。

## 5 学校教育と科学

「学校教育は科学になるべきか？」と問うてみると、半数強がNOと言う。科学社会の現代にあっても、学校教育の状況はこのようなものだ。同じ問いを医療について尋ねると、全員がYESとなる。断っておくが、ここで言う科学とは自然科学や一部の社会科学のことで、実証的で誰もが再現できる内容をもつ。

目下のところ、学校で生まれる諸々の問題のすべてに対応できるほど科学の力は強くない。しかしそのことを批判するよりも、実際には利用できる科学の理論やデータに見向きもしない学校の風潮を憂うべきだろう。医療でさえ科学的根拠（エビデンス）をもってやって行こうと身を正している昨今である。エビデンスなく構築される学校教育は、多くの間違いを犯している可能性があることに目を向けるべきだ。

本連載で紹介する予防教育は、可能な限り科学であろうとする。学校を科学の舞台に押し上げる試みがそこから始まっている。

## 6 教室での授業を喜びに、そして全国へ

予防教育の授業は、子どもたちを強く引きつける（写真2）。そして、誰もが活躍できる。つまり、誰にとっても教室での授業は楽しく、居場所が確保できる場と時間になる。予防教育を見て、授業が子どもたちの遊



写真2. 予防教育の授業光景

びになつていると批判する向きがある。正に、遊びになつている。しかし、遊びの本質をご存知だろうか。遊びの中で学ぶことの、本当の意味での科学的な重要性をこの連載では明らかにしたい。

教室での授業が子どもの喜びの源泉になれば、しめたものである。予防教育がもつ多くの直接的な教育目標を超えて、子どもの心の傷は癒やされる。そこから、心身の健康と適応問題に頑健な子どもたちが育って行く。

し、しかも問題への抜本的な対策になる可能性があるのなら、「いち早く全国普及を目指すべきだ」と声をかけていただく先生方も多い。新たな学校教育が全国の学校で実施される手っ取り早い道すじは、学習指導要領に組み入れられることであろう。最近では、総合的な学習の時間がその例である。しかし、予防教育の目指すところの最終形が学習指導への参入であっても、その道程は草の根の広がりでありたい。実際に学校教員がやってみて、科学的に効果があり、また自身の目、子どもたちの目にも良いと映れば、自ずと広まって行くことであろう。

この予防教育の開発が始まって5年目の春を迎える。現場にもまれ育てられた新教育は、地元徳島県のみならず他府県にも広がりを見せ始めた。真に子どもたちを救うことができる確信できるところまで来た以上は、全国普及を目指している。その道は険しくとも、心楽しいと感じる段階に入ったことは幸いである。